

## 吉岡まさみと美術

## 霜田 誠二

コロナ禍になってから私がしたことの一つが、鼻緒のある履物を履き続けたことだ。最初が雪駄草履。地元の無印良品のショップで見つけた。靴を脱ぎたかった。次が普通の下駄。桐製。浅草で買った。靴を脱いだ自由な感じがコロナ禍で必要だった。その次が一本歯下駄の長さ半分の下駄。一本歯半下駄と呼ぶらしい。ユウチューブで色々使用方法が出ていた。様々なスポーツ選手が使ってバランス感覚や地面を掴む力を鍛えていた。次に一本歯下駄の高下駄。一本歯高下駄と呼ぶらしい。これは古武術家が履いていた。

雪駄草履は長野の無印良品でたまたま見つけて買った。久しぶりの草履が気持ちよかった。コロナで靴など履いていられないと思った。最初の下駄は浅草の履物屋で買った。長野でデパートや靴屋に行ったが下駄は売っていなかった。下駄を履くのは何十年ぶりだろう。木の感触が気持ちよく、骨に響く感触も気持ちよかった。よく歩いた。一本歯半下駄は GETTA という商品名でネットを見て買った。一本歯下駄を履くのは初めて。一本歯高下駄もネットで買った。歯の高さが 10 センチ以上もある。これは中国製で値段も安かった。履き続けても相変わらず足元はおぼつかずちょっと危ない時もある。足首を捻りそうになるのだが、不思議と一度もまだ挫かずにいる。

足首の捻挫を未だ防げているということが重要ではないかと思っている。

次に下駄を履き始めてから気が付いたことは、下駄を履くことが私の 3 年前の開胸手術痕に大きな効き目があるらしいと気がついたことだ。一本歯半下駄は足首より先の足裏の前方だけの部位で体を支えたりバランスを保つ努力が胸腺に、いや胸の骨に効いているのだ。胸の体の中心線に 30 センチ程の手術跡があるのだが、問題は表面ではなく内部で行われた骨を切断して内部の心臓を手術したが時間とともに癒着した傷跡である。それは自然とくっついたわけであるがそれに伴う力が働いている気がしてならない。骨の癒着と共に周辺の部位が体の中心に向かう力が動き不自然な力を感じる。

それをなんとかしようとして手術後のパフォーマンスアートを使っていると言ってもいいほどだ。



secret memory 2017年  
壁に紙テープと写真 ATELIER・K (横浜)

昨年3月のニバフから開始した新しい作品は、その後中国西安、ベトナム 2 都市、メキシコ、カナダ 3 都市のフェスティバルで発表した。「黄昏のピギン」という中村八大と永六輔が作った曲を歌手あきなおみが歌った。元々は水原弘の歌。覚えている。その曲を繰り返し流して私はただ上を向き続けるというパフォーマンスだった。話せば長いけれど近年次々と死んだ私より数歳下の友人のことを思う作品だ。黄昏のピギン。その曲名のように確かに私の人生の黄昏が始まっている。最初は数回のリピートで10分ほどの作品だったが最後は 40 分を超える作品になっていった。私は上を向き続けるだけなので最初は首を痛めて回復に時間がかかったが、やがて首筋が鍛えられ疲労は残るものの連日のパフォーマンスが可能になった。

話を下駄に戻すと一本歯下駄も慣れていった。ふくらはぎや太ももの筋肉の張りも最初の頃と比べるとやがて随分楽になった。

決まった部位の筋肉が鍛えられるとどうなるか？他の部位の筋肉を意識すると他の部位の筋肉もリラックスできるようになっている。私は手の指を曲げたり伸ばしてみるとそれがどのように足の筋肉と関係しているのかがよく分かった。忍者が指を曲げて印を結ぶようにすると下駄で縛られた足のことによく理解できるような気がした。その印を結ぶことが美術なのではないか。印を結んだ指先から下駄で縛られた足先のことまでを全体として考えられる。

柄にもなく大上段に美術のことを考えて、結局は足の太く長い筋肉と指の短い筋肉の話に落ち着くところがパフォーマンスアートだけをしてきた私が、多分美術のことだけをくまなくやり続けてきた吉岡まさみ氏のおだてにまんまと乗りステップスギャラリーで4回も個展をした顛末である。

印のことも筋肉のことも全くデタラメでありインチキな説だ。だから私は自分の個展を冗談個展と呼ぶ。でも確かに足の筋肉は鍛えられ五階にある吉岡まさみ氏のギャラリーに前よりも楽々行けることは冗談から出たコマのようである。ライフ・イズ・ジョークという有名なフルクサスのテーゼがある。

(しもだ せいじ/パフォーマンス・アーティスト)



secret memory 2017年  
壁に紙テープと写真 ATELIER・K (横浜)

## 秘密の記憶

年を取ると、変化の無い毎日を送るようになる。若いときのように、いろんなところに行ったり、いろんな人に会ったりすることもなく、賑やかな感じがなくなってくる。寂しいといえば寂しいのだが、こんな穏やかな日が続いていけばいいのになあと思ったりもする。

で、何をするのかというと、昔の思い出に浸るという楽しみに耽ることになる。楽しい思い出ばかりではないが、昔のことを思い出していると、あっという間に時間は過ぎ去っていく。ときどき、あれ？そういえばあんなこともあったなあ、と思いがけない記憶がよみがえることもある。

人間の記憶にも限界があるわけで、すべてのことを思い出することはできない。思い出せないまま消えてゆくものがほとんどであろう。

そんな記憶の森の中で、大きな木の陰に隠れて見えていなかったものが、ひょいと目の前に現われて、わたしをびっくりさせることがある。そういう記憶に限って改めて眺めてみると、きらきらと宝石のように光っていて、大切なものに思えてくるのである。

わたしは、その記憶を現在のこの場に引っ張り出すことはせずに、そのまま木陰に隠しておくことにする。大切だから秘密にしておこう。

吉岡 まさみ



secret memory 2017年  
60x84cm 写真に紙テープ ATELIER・K (横浜)